宮沢賢治とエスペラント

（2023 年 8 月 5 日、仙台・羅須地人協会発表用資料）

佐藤　竜一

（宮沢賢治学会イーハトーブセンター前副代表理事、岩手大学非常勤講師）

1　エスペラントの思想と日本への普及

1887 年 7 月 26 日、ロシア領ポーランドに住んでいたユダヤ人の眼科医・ザメンホフが人工国際語「エスペラント」を発表した。

民族が互いにいがみあう現実を見て育ったザメンホフは、その現実に心を痛めた。言語に堪能なザメンホフはやがて、すべての民族に共通な国際語を採用することで民族間の対立が収まるのではないかという考えに至った。さまざまな言語を習得する中で、ザメンホフは文法上の工夫を重ね、エスペラントを創り出した。エスペラントとはザメンホフのペンネームで、「希望する人」を意味する。

19 世紀以来さまざまな国際語が考案されたが、現在生き残っているのはエスペラントのみである。これは 16 か条の簡単な文法規則を習得すれば日常的な読み書きができるという高い実用性とエスペラントが理想とした国際平和主義が支持された故と推測される。

ポーランドで生まれたエスペラントだが、やがてヨーロッパ全体に広がっていった。その際に大きな役割をしたのが、ロマン・ロランやトルストイといった著名人だった。

日本では、ザメンホフがエスペラントを発表した翌年の 1888 年、読売新聞が早速紹介記事を書いている。

急速に普及しはじめるのは明治 39（1906）年になってからである。キーパースンは日本近代文学の父とされている二葉亭四迷だった。二葉亭の著作として『世界語』が同年 7 月に刊行されている。日本で最初のエスペラント教科書だった同書は大変な反響を呼び、同年には日本人会員約七百名を擁する日本エスペラント協会が設立された。

衰退期を経て再びエスペラント熱が高まるのは、大正デモクラシーの時代である。自由主義や社会主義の思想が高揚し、文芸の世界ではコスモポリタニズムが唱えられた。

この頃は世界的なトルストイブームで、その動きは日本にも波及した。大正 5（1916）年には雑誌『トルストイ研究』が日本で創刊され、武者小路実篤や徳富蘆花などがトルストイの博愛主義の影響を受けた。武者小路はトルストイの理想主義に触発され、宮崎県で「新しき村」をつくる運動を展開した。徳富の場合はより熱狂的で、1906 年ロシアの農村、ヤースナヤ・ポリャーナにトルストイを訪ねている。徳富はトルストイの影響でベジタリアンになり、エスペラントを学習した。

２　宮沢賢治とエスペラント

（1）田鎖綱紀の演説が『岩手日報』に掲載

宮沢賢治もまた、この時期にエスペラントの独習を始めたひとりである。

それでは、いつ頃賢治はエスペラントの存在を知ったのであろうか。

大正 5（1916）年 4 月 30 日、第３回日本エスペラント大会が東京で開催されているが、この日盛岡出身の田鎖綱紀が演説を行っている。

田鎖は日本語速記術の創始者として知られるが、語学に堪能で、日本では草創期のエスペランチストである。岩手出身ではおそらく初めてのエスペランチストと推測される。当時も地元の有力紙であった『岩手日報』と強力なコネがあったらしく、同年 5 月 2 日から 5 月 13 日にかけ、演説内容が 6 回にわたって掲載された。

筆者はこの『岩手日報』の記事を賢治が読み、エスペラントに興味を抱いたと推測する。当時賢治は盛岡高等農林学校の 2 回生であり、盛岡に住んでいた。地元の有力紙を読まなかったとは考えにくい。

さらに、田鎖は賢治の遠い親戚であった。田鎖の兄・綱郎の次男・治が宮沢家本家に婿養子として入っている（後に、治は改名して宮沢宏となる）。賢治の父も母も宮沢家分家の出身で、数代さかのぼれば本家につながる。宮沢家の結束は強く、本家が田鎖綱紀とつながっていることは当然、賢治にも伝わっていたはずである。その遠縁の田鎖に関する記事である。おそらく、賢治は興味をもってその記事に接したものと思われる。田鎖の記事には、トルストイがエスペラントを支持したことも紹介されていた。

3　イーハトーブとは何か？

エスペラントの存在を田鎖綱紀の紹介記事で知ったと推測される賢治だが、すぐには学習には取りかからなかった。独習を開始するのは 1922 年頃とされる。これは新渡戸稲造の影響と思われ、エスペラント特集号である『改造』（1922 年 8 月号）を賢治は読んでいたとされる。

理想郷としての岩手県を意味するイーハトーブ、イーハトーボなどのことばが現れはじめるのは 1923 年頃のことで、このことばはエスペラントに影響されたことばである。

賢治は生涯９度にわたり上京し、合計で 350 日あまりを東京で過ごしている。賢治は家業である質屋兼古着商としての仕事に嫌悪感を抱いており、東京で自活したいと思ったことさえあった。

大正 10（1921）年 1 月 23 日、賢治は家出を敢行した。質屋兼古着商という家業には魅力を感じることができず、健康上の問題もあり、人生に行き詰まっていた。前年入信した国柱会事務所を訪ね、事務所で働く事を望んだが、かなわなかった。

とはいえ、応対した国柱会理事・高知尾智耀に文筆活動で法華経の教えを広めたらどうかと諭された賢治はつかれたように童話を書きはじめた。この頃一月に三千枚書いたといつ伝説めいた話もある。

7 か月に及んだ東京での生活を打ち切るきっかけとなったのは、妹トシの病気だった。そ

のことを告げる電報を受け取った賢治が帰郷するのは同年 8 月中旬のことである。

やがて、地元の有力者である父・政次郎の働きかけもあり、同年 12 月賢治は稗貫郡立稗貫農学校（後に岩手県立花巻農学校に昇格）教諭となる。この仕事に賢治は興味を覚えるようになり、熱意をもって取り組みはじめた。

定職を持ち、生徒を教えることに生きがいを持ち始めた賢治は、東京への思いが少しずつ薄れていったものと推測される。この時期にイーハトーブ、イーハトーヴォといったことばが使用されはじめていることから、私はこのことばが「脱東京宣言」の意味合いをもつとした。

大正 13（1924）年 12 月、賢治は童話集『注文の多い料理店』を発刊した。その奥付の裏の広告文にはこうある。

イーハトブは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、野原や少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。

実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもつて実在した

ドリームランドとしての日本岩手県である

そこでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雪の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。

「ドリームランドとしての日本岩手県」を意味するエスペラントをもじったこのことばは、今や理想郷としての岩手を意味することばとして広く知られるようになっている。

４　なぜ、賢治はエスペラントに惹かれたのか？

それでは、なぜ賢治はエスペラントに惹かれたのだろうか。

ひとつは、思想的な共感であると推測される。民族間の不和をなくしたいという思いを強烈に抱いていたエスペラントの創始者・ザメンホフは個人の立場より人類としての立場を重視する人類人主義（ホマラニスモ）を掲げていたが、この思想は賢治の理想でもあった。

花巻農学校教諭という仕事に生きがいをもって取り組んできた賢治だが、次第にその仕事に物足りなさを覚え、1926 年 3 月 31 日退職した。

農村に芸術の風を吹かせようと同年 8 月、羅須地人協会を設立するがその直前に記した「農民芸術概論綱要」には次のように記されたことばがある。

おれたちはみな農民である　ずゐぶん忙しく仕事もつらい

もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あつた

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

賢治の理想とエスペラントの思想とが合致していたのである。

さらに、賢治が読者を世界に求めた点もエスペラント学習の動機としてあげられる。

同（1926）年 11 月、旧交を温めようと訪ねてきた盛岡高等農林学校時代の友人・小菅健吉に対し、「世界の人に解つてもらうようエスペラントで発表するため。その勉強をしている」と語っている。

この年の 12 月 2 日、賢治は七度目の上京をするが（12 月 29 日まで）、エスペラントの学習も目的のひとつだった。丸ビルの 879 号室にあった旭光社でエスペラントを学び、エスペランチストだったフィンランド公使・ラムステットの講演を聞きに行ったりした。

ラムステットは 1873 年生まれ。アルタイ言語学を専門とする言語学者で、1920 年 2 月 12 日初代駐日公使として来日した。日本語も堪能で、『改造』にも寄稿している。賢治は『改造』を読んでいたので、ラムステットの名前に親しみを感じていたのかもしれない。日本には 10 年ほど滞在し、多くの日本人エスペランチストと交流した。

当時はエスペラントが世界中に広まるのではないかという期待に満ちており、ロシア出身の盲目の作家・詩人エロシェンコなど、外国人エスペランチストが多く日本に在住していた。

エスペラント文学の可能性があった時代である。たとえば、エロシェンコによるエッセイ集 が 1923 年上海で出版され、その後、日本語の翻訳が出ている。

賢治は、世界で読まれることを夢見て、国際語としての可能性に満ちていたエスペラントに接近していったのである。

帰郷後、賢治は羅須地人協会でエスペラントを教えている。翌 1927 年 1 月の講義案内には、エスペラントの講義が盛り込まれた。羅須地人協会時代の賢治について、賢治の祖母方の親戚に当たる関徳弥は「朝は暗いうちから起きて御飯を炊きながら、エスペラントを独習する。ドイツ語も覚えなければならないし、天文や、地質学や、音楽もというように、精魂をこめて勉強するのでした」と記している。

とはいえ、いくら習得しやすいエスペラントとはいえ、独習には限界がある。独習書で文法を学んだとしても、実際にエスペラントを話す機会を賢治はほとんど持てなかったものと推定される。

晩年に親交があった佐々木喜善は日本エスペラント学会の会員で、熱心なエスペランチストだった。国際連盟の仕事をしていた柳田国男のすすめでエスペラントを学習した喜善は、世界エスペラント協会にも加盟して、熱心に原書を取り寄せて読んだ。

賢治は佐々木喜善ほど、エスペラントにはのめりこまなかった。日本エスペラント学会の会員にならなかったし、原書を取り寄せて読むこともなかった。

エスペラントを学習し世界の読者に読まれることを望んだ賢治だが、生涯に原稿料をも

らったことは一度だけ（5 円）で、無名作家として一生を終えた。

賢治は原作をエスペラントで執筆するまでには至らなかった。賢治のエスペラント作品として残っているのは、「エスペラント詩稿」と呼ばれる詩八編のみである。

＊最新の研究成果に関しては、私は主に企画し実現した「宮沢賢治とエスペラント展」（2022 年 4 月 2 日～6 月 27 日、宮沢賢治イーハトーブ館展示場）の図録（定価 500 円、送料別途）を参照してください。問い合わせ先は宮沢賢治学会イーハトーブセンター（電話　0198 - 31 - 2116）です。